



みなぎる気迫、
静と動。



畳の目に沿って札を整列させる



座布団で襖をガードする



札が読み上げられる時を待つ



出番を待つ百人一首かるた



集中力を高める

ちょこっと
インタビュー

篠山かるた教室のみなさん

こ
とさら雪の多かったこの冬。取材当日も、数日前に降った雪がまだ畑や路肩に残る、肌寒いいちちとなっていた。しかし、かるた教室が行われていた「かやぶき民家」のふすまをあけるとそこは別世界。裸足に半袖の生徒さんが、神経を集中させて畳の上に整然と並んだ札を見つめている。しんと張り詰めた空気が流れる中でも、それぞれの身体からは目に見えない熱気が立ち上っているようだ。篠山かるた教室が、ここ「かやぶき民家」を会場に練習会を始めるようになって約2年が経つという。

「かるたは室内スポーツです」と、何度も口するのは、父からこの教室を受け継ぎ、自身も子どもの頃から百人一首（競技かるた）選手として活躍した水井廉雄^{すみお}会長。阪神間には競技かるた教室があるというが、「ここ篠山は県内最北の教室」ということもあり、お隣の丹波市だけではなく但馬地域から顔をみせる生徒さんもいるのだとか。現在のところ、その数は約20名にも

のぼる。札の読み上げを待つ間も、それぞれは札を取る素振りのような動作も欠かさない。そして札を取るその瞬間はまさに電光石火のごとし。パシッと鋭い音と共に、時にはほとりの組のゾーンにまで、札が投げ飛ばされていく。その勢いで「飛ばされた札で襖を傷つけないように」と、襖を守るために座布団も置かれているほどだ。

「競技かるた」といって、頭に浮かぶもののひとつが実写映画化もされたマンガ作品『ちはやふる』。当日参加していた生徒さんに聞くと「ちはやふるを見て」競技かるたの門をたたいたという生徒さんももちろんいるが、「お正月に会った従妹と一緒にやってみたけど、負けてしまったので悔しくて」始めたという生徒さんみれば、「おばあちゃんに勧められて」「札をサツとはらう動作が気持ちよさそうだったから」という人も。みなそれぞれのきっかけで「ハマって」しまったらしい。

質問の最後に「集中している時って、どんな感じ?」と聞くと、それまでポツポツと話していた生徒さんたちが一斉に「札が光って見てるときない?」「あるある!」「わたしは色が違って見える時あるな」「予想して、こい

こい!」って思ってたそれが来たら、めっちゃ気持ちいい!」「わかるー!」と口々に言い合い、今日いちばんの盛り上がり。頭も使い、身体も使い、そして集中力が研ぎ澄まされた時には、これまでとは違う景色が見えてくる。なるほど、確かに競技かるたは「室内スポーツ」であり、夢中になればなるほど奥深い世界なのだと教えてくれた瞬間だった。



篠山かるた教室の皆さん